大鈍詑新文鬼談

A757
1

大鏡記新文鬼談發端序

吾十八才の年愚者の光音天より智作地本の字獄に陰落して尻に火のはく催促に絶かねて二十とせ世上を隠戀暮しけんがる子と出て見れば忽ち変て浮沈は立よくくの僞書は直下とありて横文字のよこ讀に四海の往來もちか頃は珎説が時花を見るところにいまで傳信機鉄道の音も香もあれ冥府れ秘説を穴かしこくも新文に鬼談と題して筆を採

無間字獄の自墮落在人
万亭智作郎應賀誌

明治五壬申
青陽初開市

A

48-7681

俄分限道具屋定右衛門の賢子定太郎父の貸金三千五百両の證文を鐘に張製て浮地の別荘において鐘供養を営む
母お千
賢子定太郎

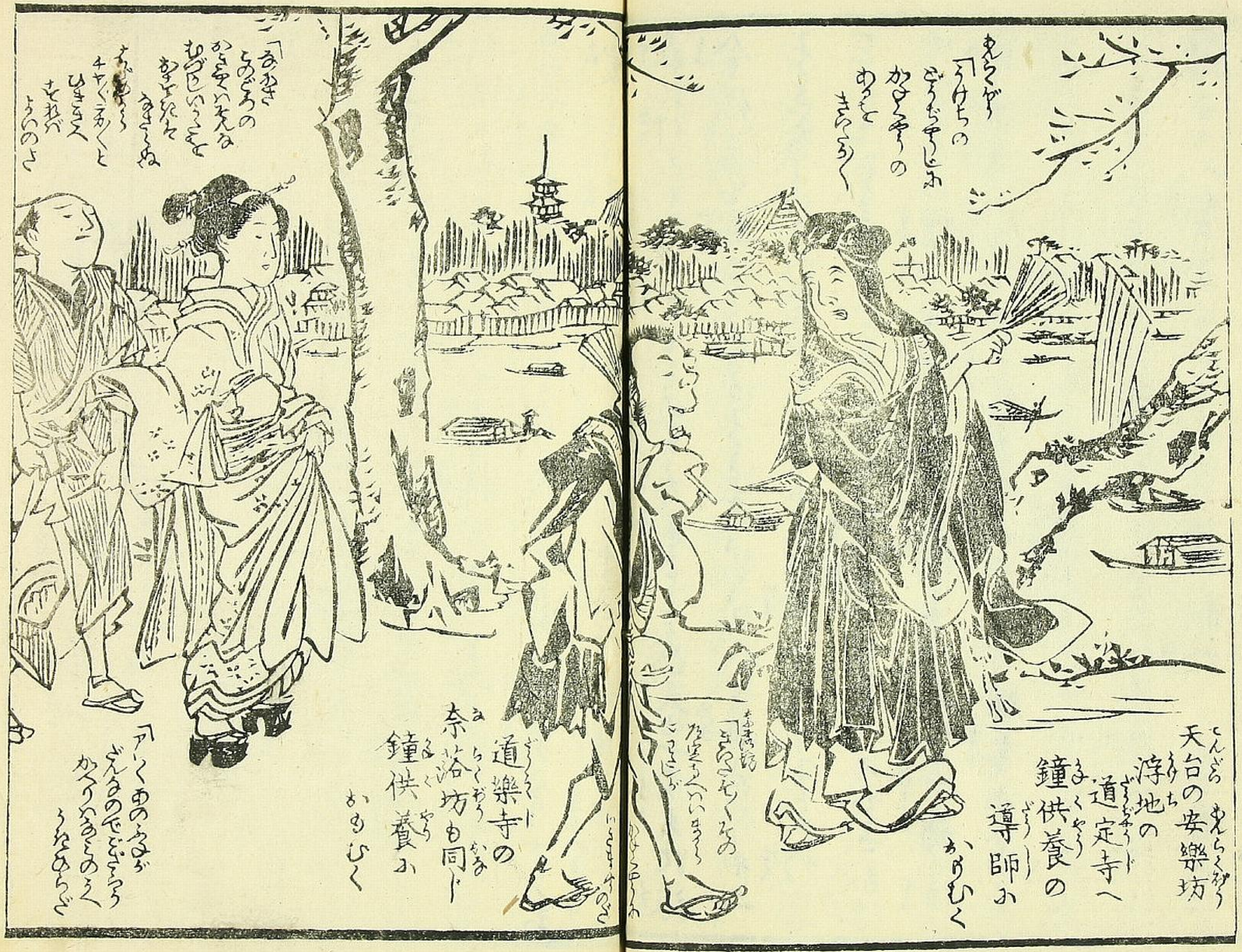
伽母陀羅屋樓
五道の冥官
正月十六日
齋日に
摩
伽
母陀
羅屋の
樓上にて
名妓の
惣揚として
冥府の
新浄瑠理
端唄の
會を
催そ

大鈍託新文鬼談

万亭應賀著

●安楽坊「きんらく ▲素陀坊「きんぞく・「きんらく▲「きんぞく・「コレわたくしらくるところは坊さんぜんたいらくがきんらくくとらへどきんぞくとらへがたいまで行ひもいはぬふかあらきましぢや▲「是そおろしいめあされいはぬものをなんぞやてうがころまろのう今うしがきんぞくとらはさへるにみよくぬ極楽らぞ哀咄ふきそ大きいのお布施にめをはけたそのまんま極楽別

滌の黄売屋で二三ぜい立ながらぐツとひつかけてきんかの
わしをひつかついでひで来させばらおくきそうらおの
ぎりにおても足も湯屋嫡のやうなまつらふあつれどきれいさ
めんそこできいらぞつくといつまし　このごろ「あまりおかくしい袈
裟をかけさ衆の不作法せんぜん▲「イヤあのつうしがぶさわすれ
こまもよくおぜんドシテ坊のきいらおくしらうなさまこさい
まさかふ出へでござる●「さまぶつうしがきいらおくとうへさい外でも
あいは東都浅草花町ふ住し道具屋定右衛門が悴定吉郎
本家を売拂ひてあの宮つま穡の東深地村同舎川の別
荘に引あてて家名をそのまゝ屋定きとよび又の一周忌に張
合供養を勤るとあまがそまをきいらおくし尊このじや▲「
そまあるがきいらどころでもあいは今りきくしそとへ行の名
ござる●「そまいきつきいさえその屋定いちどうのでき分限
でござうの檀下あるが文定右衛門きいらつて寺へ寄くるの
寄進講入用なぞ一度もごうさるなく陳堂ふさまとぞ
家内のとしい鄰も亡しぬが屋定といへだしてまま亡しぬあ
もなき貽孫を又がなくなりてくるまもち他人へゆづる
ござうへ贅者せしいきぶなで悴が放蕩くらのとでおざ


天台の安楽坊
浄地の
道定寺へ
鐘供養の
導師に
おもむく
道楽寺の
奈落坊も同じ
鐘供養に
おもむく

ろうや▲「イヤそれハ大まちがひ親のおせどゞくふなれて
ためし金を息子が費ひをうしてつひふ角地面まで他人へ
つまるその世帯ふいくらもあるかひなきまで定の落
語ふなるぐらゐそれとハ雲天万里のちがひ●「それハまさしく
つまりふさいのぞ▲「つもそもそのおきいを出へあつて
よくぞんじてゐまがおもしろきさんさてあの親定さハめと
越後から米穗ふ出てよく挊ぎあげつまりの元手出ずて
めいふ小道具の翁市をうけまはりて賣くり買くりするうち
變まで華る世の中の混雑にまぎれて銀を紙に買ひ

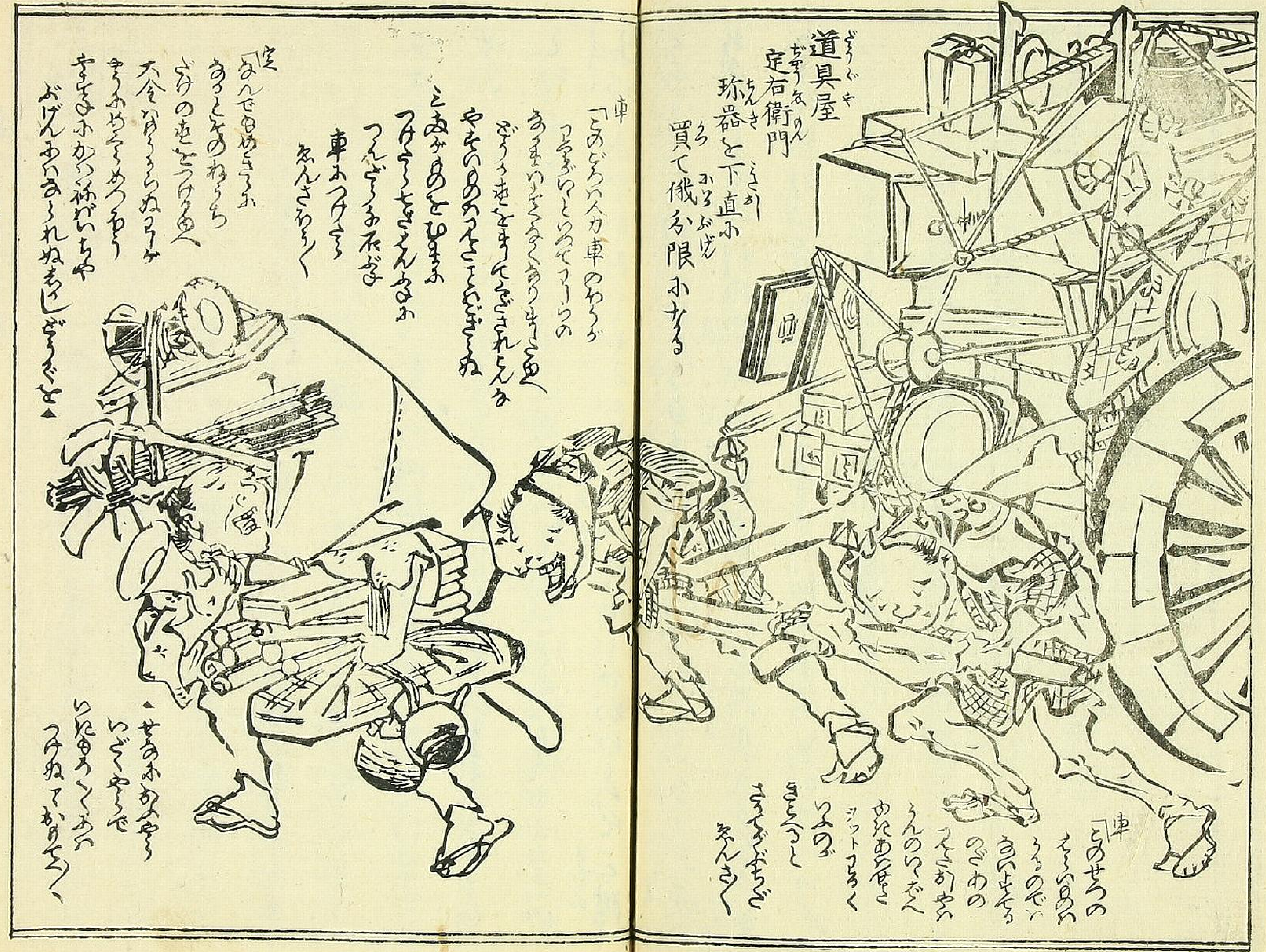
その外なんでもござれとゐらくめつぼう安くを値を付けて
二朱三文ふ買とんだ太ろ不のうちろくぬ十両百両よもる
ものがいくつも出し又摘み銭の金持となりて鏨花町に
家附を買しがそのやうなむすめとしよりまでもおくちと
道具屋もひまれあるらへ買とんだ高金の刀をさざしが
ふむきふあるまいぞさまざまの品定もあめんどうへて仍卒
今一家大金を備んとかけまはるうち我もるものさんな
付まで横濱へ高車ふのつて乗でまきかつりそ萬筆
せんの茶ふうりまで蚕紙と生糸を買ふつきゐ（二六リニ）

の日分の金を他儲こんであつらへ買とことそのうへ洋銀
れる合せをしてあつて一だん大福長者になるつもりの
めも稼ぐにつれけるがすべて買ところのがつさい
さより高ぐ六に直がさがりどいまみくとめちとこへていさ
かしが日分に追ひるがますますよけく三尺百両損をそ
買とこしにそのとのこべ手をあわせしそのにより　またまた
その品くの直が上がり定るこのきまたそて頭痛をなまたまた
あてどこふふかいずれのものきんへんに挨拶をまる両へそれに
御機嫌とり日まかせもかずしまいまくのとしかして大損をせしめへ分

貴がつくむずつさその損のもとへのいせをいつくうつしかくまでそ
その掛がうつくしく一両の金を六ヶ月で一だんにする儲をおれ
利足をまつくのつりあいにてよくとまるまで十両二十両かつ
の人をるをおのれ酒の切手菓子の折あそびのかうて三十五十
かつまる人をかなしやきの切手かつてはぶしまで百両二百両かり
る人は反物や酒積をまつてかへつても利足のかふにそん
なりのをもうしひさけまどまでをまれどの元手がないとかさ
なけまでよいりをそるなる室をびおさそ掛などにむすびいつき
がるやくをるてるさりが家の福の外の使あり コレ あつよたんま

さんにめしをたべよといふまでおやのうちにきてはなしても茶一ぜんのませ
ぬものがあるにかぎつてせがれ娘をおかしくおもへどもあまた
そんとあしどくいはずくアノ旦那さん今を貸みの身一出たるので
りのものつみぞて馬車や駕籠の主の有るいものにもののうちに家
にまうつておかみさんまで見かきれるへ行くとあたるをさげおまけに
土産までもうてくるうちがまるで自ぶんのうちとでもおもふさう
そくあさふをその人をわすれるようおけあいあきれしいてかす
しかそのよくおきるる旦那のうちは見るありにかゝるにのらせて
まづそ見ることあとも見ようあとしかしたがあしが蛇の尾ればへびとやらでぬう

くらしくこのものがるいそうな金をぬすとりつてかゝるにくるあく欲に
めがくらんで安利の金に家蔵をかきいれ見貝ぐるいまで質
入して皆かしつけ見れば様がさしうのいたるところをかぎつけて
くるやうにごとくろアつたる士が借にきて月々扶持米を
やるあんぞしり人も旦那は拘叢用に割のよいを出ひてと
百文銭ずんずんきるをきゝにはけて悴定吉爺父を出
ましよひかさぬやうに異見をもいはず先々よりにあけて
ふくらもさうちうつもくあんぞ見くれおやのたくるとこにくち
とぞいて今大利とるかにぞくるのを知らとりてひその


道具屋
定右衛門
珎器と下直に買て儀る限になる
「このごろの人力車の

ふた月に扶持米をうけるとあすこ見てくる勘定のたまり
あのやうに徳のつくものがなかにあるか有るぞよくぞ考へぬ
こりやげづくめと考へるところへ妻のおくしがもしやいてがし
あるさその安うに伜をかしこまるさするあのたゞされたら
ぐさいとのまきとて伜がごんけんかうしとのをおまく
なさる役だとそぐいきんの門扱をうけるとではいゝま
せぬたとへにもむまきものをくるまるひとにもこぢんする
といふまでとうけ見がお見の出場どこのせんもするあの
出場があるやうかやにもけば此一所をとるかへして二階

二階の家くらをたてゝかい水のくさうでござりやき
にさる場の金を貸して万代不易の身となりと
してお見ずらきゆしでもてきんくるがにんにくらす家
の礎きるとてまへ出たがいゝやおとしてたゞすりおら
うちあとのなるつけてうちあがりおくしこめるをおさへて
そ見れどまでにおがりめさがおくもあのりしいいきねがいゝ
あるさりのでござんとあきるこそ見とあさにたんかにそんを
考へてとうちつけにあつかるのをそそでいきくのがつけ見が
とそけそ金がでまぬるとてまこうちつけにで見ぬくとおう

しかるにそれまで人なくむどうにもしそゝのかすせば色を
逃して、ぜにをとり人前をつりがくのをかぶりてそんをして
なるものゝ今にいたりたりうちのの間がよくしをひつ
ぎんのかりて人かねにへ福ぞそこうしとよりかきあつめ
て三百両にましあつてその金を銭を此世のいしまでひにその
夜に親父もありしかど旅にても倅も妻もなく
うちにまさかりにくまて定た弟母にもつひておやぢさま
金をかきおあさりまくしのいんらくにくまそをしお門
しかも門にぶ手のうしろくさねそのうちにあんらくは旅おもて

其の家も他人のものなりうちのぜどころなりけんで
まるきりのさんなきしまへおもの人は貸金の高
べてさへそんと惜みおそのまますぎいるや貸金の證文
と證文をひきおつせてその貸さるにて上千両百あまれ
がいかさしおきそのかしさきをめとりなく催促にまされが
凡二千両ばかりのかしさきを退轉と死絶とてあとかたも
なく離縁となりあと千両百両ばかりの貸さきを家名を
あ且ども其の日くに困る貧窮人と其日ぐ利足はおろ
元金の円二朱もできぬとひまびそ且もあんまりなはひ

いやといふ人をゆすり金がすんだ又金をかりますが利足づ
けをくひこんでかへさねのハあさましいことでもあればかへ
さずなしにそれといふるのでもふくまるものでもないひのぢ
としよて人のおとし金でもひろハ事がかへさずあてがハねす
びとをなまよ首がすハとなげゞこさあいさつのなのだろうぞの
まつかもゆすふくかつくをのも何ほどせかんあくめなきどの
気狭か女房が出てらんな蕎麦をいふすどころでハあいがこれ
ハ田舎の伯父が達て入ますこあのおあせつか娘の稽古を
うちハどざん生せんがとまさ座敷の伯母がさせてくれますをなぞと

あけも世ぬおかやかたを引出してきも世ぬいつけをする
べくそておきやのどくながらお利足もできませんとことしまいが
定たる身何してとまりとどきかしてうけまうまいども七千五百
あのかかさんのうちびさ百文もさらんかかへまいが本にいさか
不家務をかきいまい父が備し金をあまありいてうきん返済
の日切あまい金を又もとも家務をうちすともともおりせず
めが定たる身つくぐと世の人情反覆して文のことすきことを
さとりかげ子もそのまゝをゆうてきてきが百あのくさか編笠
一つのおくへくいたでまいもなまいどでまいかもつがゝ手足武

戯分限の道定
蚕紙と生糸を
買込て大金代を
拂ふ
應賀新著作
一 聖人肝潰志
一 豊年五穀祭

さとぶらんにごろびもかくれバなれむかしと違ひてまさらに千
よの繪文ふてべつきりの經のつくりひもできず紙屑ふ賣
バびさしく百文のたしにもならず此家を立さり別莊にかも
むきて此繪文をとりて壇を張ぬき父精靈だんの前に
德供養をせんと七七日を迄過せて本家をひきあげのゑ
ゆきて目黒川の別莊に引移りしが是りん念にある
うとくとうていかゞし本意をポックくとすけバ安樂國を
つゝ明きてくよ足だづ道をみちておりろく定おや子共
たのしとさておかしくもまさらんそく世りさて世の中の人の

足ふけることもありがきておのてよいとまりさて此坊ハなどか
つくしきもハッチうとぜんじてけいその前にせうをいめる
さとよその衣をさて官なるとうんを碩学多老の出身
なれども身をごとしハッチの官ふ多りて下化の化俗ふ出る
教化するとしかあるあの一かんさもなくさてともかく
つまり天台流ふて衣も上色をきうるれども子ぞうご
ところあれバ金殿玉樓のおどうふ座せバおやみ今に及
まうれバ今六十よ去りのうちふつまず法つの弟子三千人
あれども樹下石上ふまであとしわさの衣の古めかしき

名へハいれども畜落の男女おしなべて生佛のあみだ坊とよび我
名とるのまでそのわくも名をとるのりてきろしめす人ぞも五
山流かたぐし極林流かいづまとかして白太るのこいるド出え
おいさん△「ことあくいくゝいるあかくさせるなりのてなされ
びやど六で五さんの名をあつされどもどんてんと云らぬ
名も志らぬ●「イヤく おおくしある檀供者の寺師を
つとむるものあく小ち末るの院主でまかいおの弘
法大師そいまわつて空ぶま衣で諸国を修行なさる
ときゑげがりし名ぶるたせきがくのおかくさるがごもか弘門

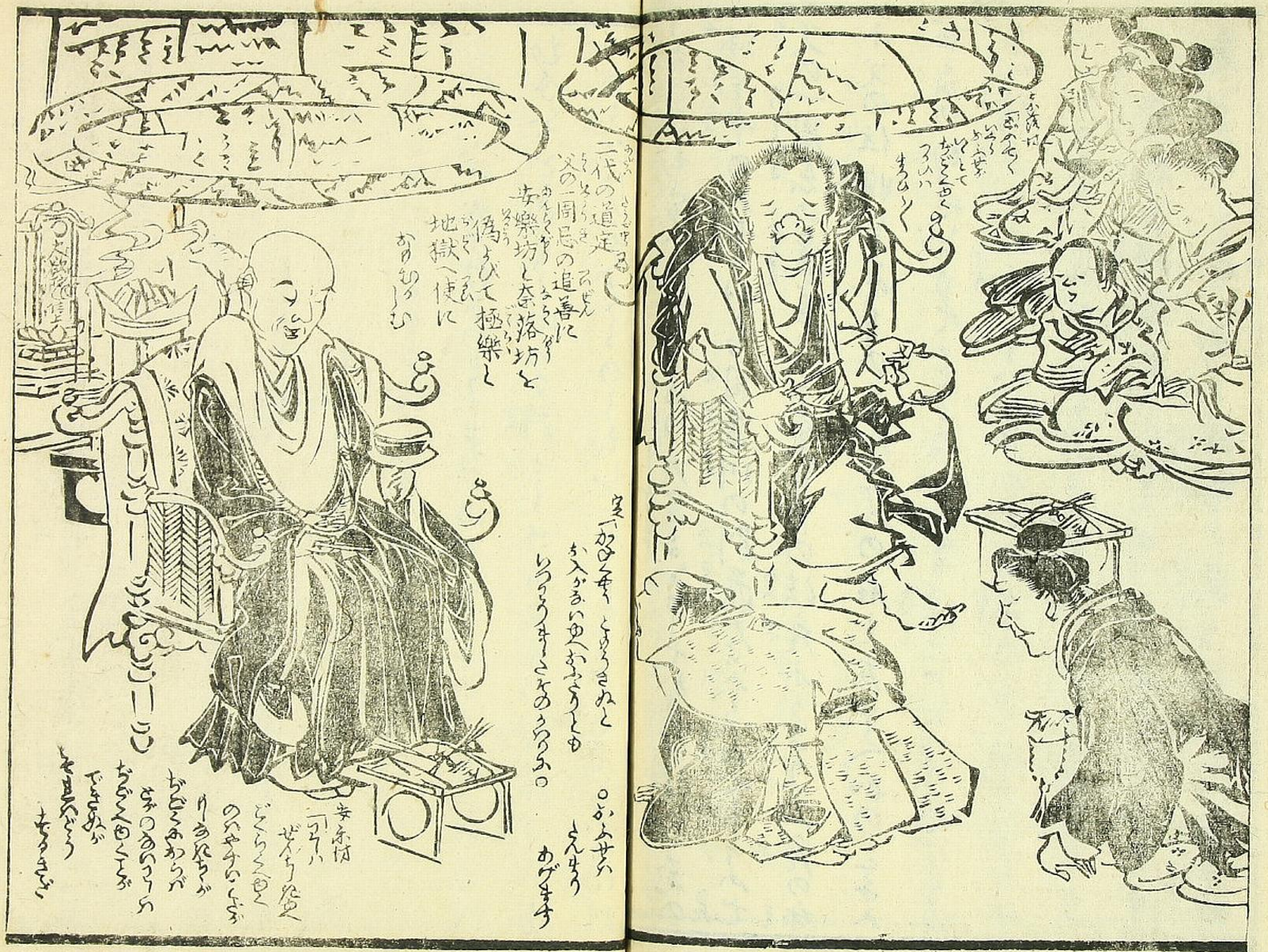
の奥儀を編ぜん△「めずらしその事にお世なさまどぜむ
がすいお宿をおかしまをそ●「それはうるさげなれ何院の住
僧侶なるぞ△「さやうハ申れ法まんできくしいわの宝
うちつしがしでうちありしがつらさふりうんさぶかさるるて
本家をいでんのときいしまが出て親の家にのぼるがいるや
三日もうぬに往復へかよひていせつのものとなくし親の
かれへぶるをぬかるのこえらぬ親類縁者へいてぼう拵を
うけてつひに勘当さまを拵んでくるまる叢なりまべせんド
つめさ弟のうつきもなく当まくしらへ奶末の町のうら

備家にかゝる時このねんあきし女夫でくらしけるに
まつせくその中にるぎんぎりあるが女房のおびのやれぎ
れでコレこのけさもでちらひつぎこしとどいけちとちて悪坊を
こしらへきせしかば五六来る斎藤坊とりまかうゝるのつ
てあるどころぎをうのこの木魚をホクくこうそにかゝ出まつ
せのつばきりんくゞかゝづくしあるりのづくしおつひの燭台
そくせきあそでふかん丁二丁目し紅うんとし幅対の方と
なりしが座敷の窓下めくぞあはでるきもいつけるほどの
夏がふる釈迦牟尼如来と酒のむふようのめぐらしてぞ

出合でのこらひまるで是ひ雨晴ときへば西のうちにわかれき
なまびんのつると是ひ阿字とらへばさるなようれるを知る
ぬ斎藤坊がぞうして天下のぜんちしきさなしかさをする
べるとがでまん。あまこのお入るを寿春ぐんなのりまとひろう
ぶらいで達供者のとなりば在家寺のちやあにあるがなに
うらなのかぞくうし梅とさくらのまつりどまでをお経に
よんでの木魚をおくしてさけりしがお経のお好がでる
そのつぎのさえふある哀の手おつけまつひてさきふへ
ゆましてべふうそつきまでみんなおめしへえんよあぞでかとく

したゝかおどろきて　つけせざりしのあはせもちだすをとり入ればそれから
あくれば日よくひのうまくきゝまて来りとぞちよつてはやく
くらくるぞうらくらくどが巣の下なりぜんのとんりうせせぬ
ときゞおの乃ど仏(ぶつ)がひあだまはぞうりうて一日お弟子(でし)おほぜき
まではおのぞをさしせてくださるまじく夜(よる)の神(かみ)にまいりつきらが
ろりあるまをとうたけるを安楽坊(あんらくばう)つくぐりんでぎて南無さんの
あくさうとこりきまたそうがまことやさしく由身のこけくござそう
とさんげするそのこゝろまことふびんなまでなよなおりつけるなり
〽その日のこゝろへしさいばうがたりへふつきわづらんのとしも

ましまかなうぐへとつふくめつて茶(ちや)を定むるをさしておもむけり ○ 花の
孫生中(さんちう)の女日うけち月さる川の別荘(べつさう)か定ちるおとそさ文亡(なき)
父の一周忌(いつしうき)の営(いとなみ)とてひとまそちるの法座(ほうざ)をもぞうり上座の床(とこ)
に父の位牌(いはい)をそえてそのまん参んの右しおろへかのこ子文
百度の机でとりてちゝぬきさる燈(とう)二ツをとりあげその
下へ椅子(いす)を二脚(ふたつ)とらへかきてそや午(むま)のこくあまりやうぞうかり
いふさぞあくしあゐるところへさとなおおくせし親族(うから)らち交へ
の一周忌(いつしうき)に続き結表よふ世(よ)にめでゝしまことあまたるでて香
奠(でん)をそりとてそまかく結縁(けちえん)に集(あつま)りけるところへ安楽坊(あんらくばう)


二代の道定
父の一周忌の追善に
安楽坊と奈落坊を
偽よびて極楽と
地獄へ使に

羅漢坊もさすがにきこえし宮寺みかんでむかひてつまをさ
ぐしけてすりどもさせずとまり法然あまいかしまづ安
楽坊を右の椅子につけたりのいさいあまつく坊とつけれ
ばあまりく坊もござまでも安楽坊につきそひてござります
もうしろぞへまわちをあいてをきさんとそしをかけ位
の椅子につけらもそいするちぢとやつれるとしあんど
まづへいだしけふのさしさけの名いもさらりとさあされ
むりをどきくしくいりわりまけちなんの親族さちも
いあらびけりいへちちのくちをつんでとじしあんらく坊れ

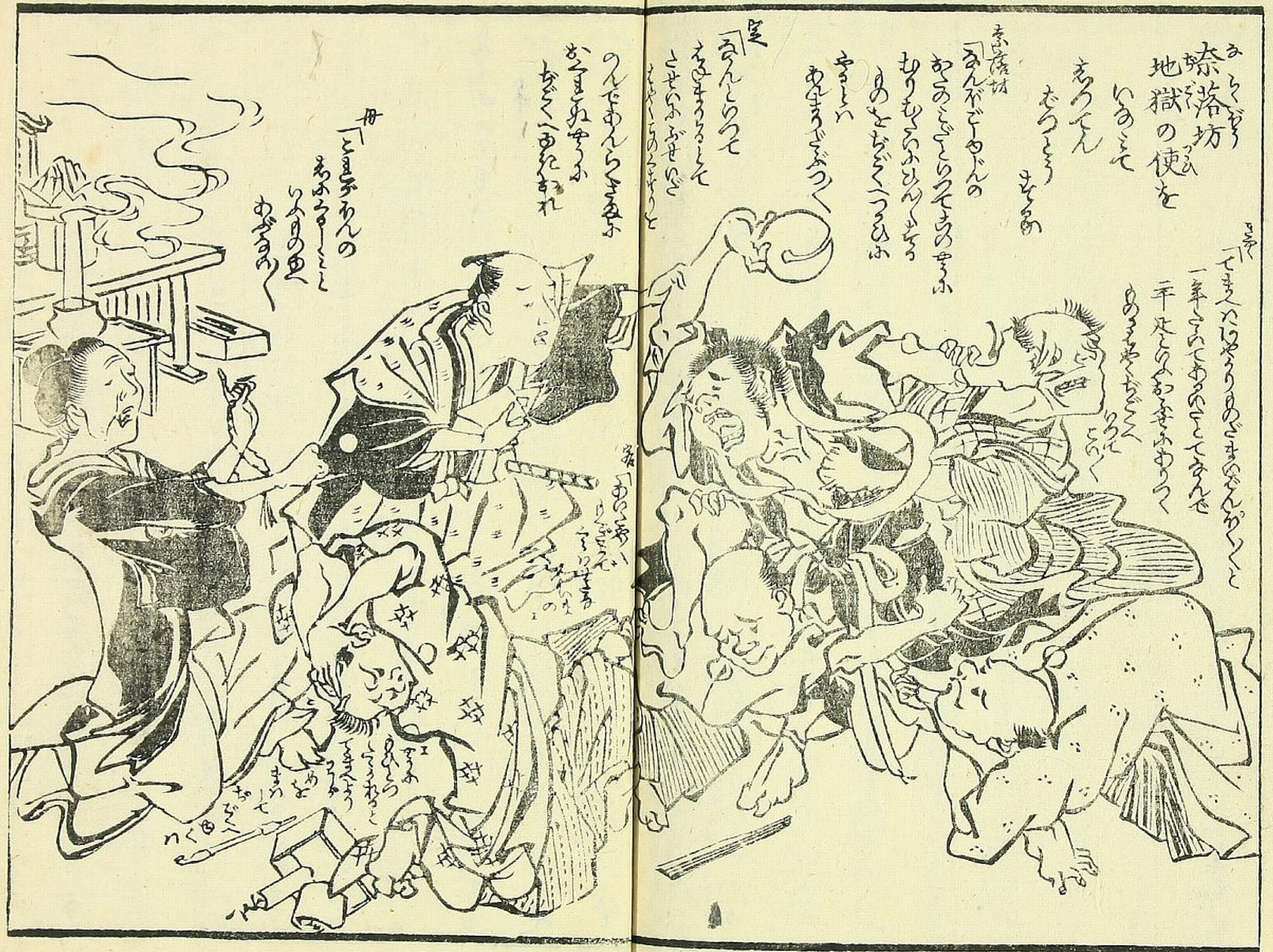
いそのさるをよと目でんそのぐらふきもちをつくろひてめかもち
ぶんおおどとつきぶして木魚しおもどえり右のひざふかもち
まへしさるそさるすぐ羅漢の中にふつれあもど文ぜん分へふる
くとふる人ひさいより小声のおせをとすごしてめをぱちくと東
ろうせてのこいつかりうく宮寺ゆ小世をつと二ツもらきのぐい
ふのせんらづきいりでまづ安楽坊のまつてぎしていんぎんふもの
まいしりくばどめくなめ「今かおそらく世のならにれひらうと
よそずとまかり分をとへりかいんまのがすかくらいつんまうく
てかみくせりすしくござるぞん又ちまりれくえいしありがたき

志あらせらるゝかさへぜんちしきとまでうたはるゝそのつくむけん
をのがとがをさとりてぜんあつてさんげつかまつる今日をかぎり
とかづけては侍かうせらる全くいつはりあり誠はすぐ父
からそうふれて妻子のいさめといはゞおろかのよくさまにおい近
さぬとつまびらかにつげまをしせざるの由へなしなるぞ冥土に
いますぞ亡父のうへにおかる霊と三ヶ条あり是まづ弟一にる
さぶらひて亡父かゝるへ身代金およびも大金をせびりかけおきやすそ
いつまもなにおんらくにうまぐしておかめさんがそのかまん二千
文百両のうちばさ百文は今におさまらずその証文紙屑になるが足

百文にかぎるべし・家財家藏も父が一人の名にうしなひて今母と
ともかくろとしにまよひて廿二にいかに今にいるもの地へさらさん
おまひきいうまでは同男におんうけあのおそれりいらんおつがそれくの
亡者とおんまちの庭へうつして浄破利の鏡にむかはしめまさ
業のそろりおうけさせまく證札とりつゝあきさせて虚実をさだし
あなし。弟ふ宗につきて亡父の悪日今日の近着用向をわんどうに
つとめがそのくらく亡父のうゑさぶらふるやそのいなやときてこゝた
こざるまじあの三ヶ条も記人の所役はいうまもたゞまじも返
ともつの產子なそからもちくいろん郎役てんぐうしるもかぶうぬさとう

丸へあの世にわたらんとこゝろざしのうへにしおもひつきしは信心極楽
往生とはさだめしたのもしき事にふかきかうの仏弟子もなくされ戒名も
大歓院晴決思味信士とおつけなされたるに娯楽の記絶え
とまづ一人の業をきゝとしそして行年ざんじのうちきせのあ
あひてかくらくへかけるもさきつゞく亡父へ右の一条をはなしきみの
うへ又まさにありあひてそのかへりごとをきかしめ安心にさかんぶう
らふられしぞちめよりおまとをりて数々に入りまいらせんとおもひて
かなしやうとうつくりしごんまつりしごあんくされうしぞのはふせ
られ年忌いらいへそのへかくしまいらせてさもなめいさしなまど

まさしもかどあくけしきもなくて「ヲそのあとはいさゝかえくまぞうく六
業にかけがえてうづしその後のうちにも入定して極楽へかけむき三ケ
条の返書をしるは定めしもまどしも万一つま極楽へかなへるしと
定命にむかひかなびんぎにてとくとくへまいるまいと其のしるしいふに
せんや「そのしるしつまりしぜんのすゝりとのべておめとまりおひうけ
てかあふかゝる「ヲそのかくどのまゝかしまさしまれぞのちゝの在世
の法り(?)をつんでまさしく極楽往生かならずしもそめうちとくにもま
がつきあえつれどなくへ申くしあらんとまたいうにせんや「いつにもその
はらひいきおめつしもつきしもさんぞんずまどもしとさるにちく



奈落坊
地獄の使を

のついぜんとさつゝあけの見へしのわどのぐらくへおけむつゝまうしけれ
おりくどりしやしぜんとてぢごくへ宮使しアレわのらそてからゞ悪人の
すゝくおうをよびおきけまがわみてみそぢごくみおつまへすくおく
らくへりぎく良臧良生なされべくとそうなまへ・「りみなや、おもよ
ようがへるそのとびそゝのつみんとかしまでしまとわのづみ罪をとげま
生身魂魄极楽往返し唱へ合掌してまいとどちのへげち
みんのゆめあむめこぞくしきりけゝ見罪をそく入より香盛ひかる
さて定をふけいそまより東磯坊のまへ申えてくさつゝまゝて
ざいおんわげ　定「ヤイそゝゐ鬼坊をいま安楽坊へねがひし案つまびら

かふきしゝまびわゝあくりのまで申あいそもちいあがしゝかせうふなつ
さうがちゝ申へでまぎんとゝかひすがゝぢごくへ申えてかられ申つんき
まがちごくぢうどころなくおゝ猿わのてかの三ヶ所の御返事状
きいて庄家をゝがふさ申くところへまさだ見て獄卒らがみん
どとゝみてゝおさるびちやだへいよゝそてまゞそのことわ罪状書に
ぜんどんのつゞへみまが悪事の世あわ定命のとれとりのよく
んの三ヶ条の第二のめる金をかゞる亡者父へ返金のことなり
てまう訴文入用すゞかそのよ　つゞ麦おし世に申あゝみへがきの罪
よりその訴文をへゞしゝりて返金の亡者の名をとまへてその訴

ゑ文と香炉にうつまて一ぺんのけむりとなさばかりかの七若のめにハ
つくねども鼻の穴へハ梵文のかほりともさとろつけん名んろのひた
御施ものも二千疋をへおけがよそごへまうけしまし イザこの菜を
のみくさしいふぞ▲「コハおかひもよくねがくしかずくやうにせう
これをともぢごくのつひみいはゞのまゝじや 定「さまざまこと、やうへハこれ
ゆへおうべんとめてよびよせ ましよおんどとりてかずく安する
ときいぢごくらくのわとけになつて七老もぢごくへやどがへとなるを
めいさうさへうばふのことをうけくめのごくまう▲「うそじもごくらく
あんがひとまめんもまくつんまどぢごくしきてめまんぷらく

定「コハありがたきことをおつしやつてでます人のやうなごくわくおんがをんでござ
らくへゆうきるのゝ悪人の困にろのわぢごくの使よりわつかなるい
身にかはじうる人のこゝろにいつてんこのいやふのうぐりにて
おろすひうぬ安楽浄におもまとねやうりそのでこの菜とのみ
しらちかまじやぞ▲「めちやまをとつのかんせものいかぬ、そこのめいてあかして
ぞきまとしいちよりどびあつてかげのでんとまうをあかさんやしし
と結縁のためのもちかりてあり おさへけまじがえめころさまる
わどのこゝろをあげて、あたいぶつりつその名びのやうになるまなり
しぐらいぜのわとしられてうどくまうのかゝ様が定ちを卿こぞつの

くすりをもりむりにくちにわりいれさせて　定「コヤおそろしやまつ
こくのそこうすにわかねがおもひとゞくにまちてゐるこの家をも
しつてたちつゞきるもりがその木魚をさくをかいづにかゞやかせし
猿をひらくすりといつさうしまゐりそのまゝに家のえしさまを
つるようらへする猿を霞ひつて布の猿すろとゆふ
よとゞへるくるかしづまをとまちろまへでそいたりける

大鍼記新文鬼談初編了

二編三編ひきつゞき出板仕候

發行
書肆

西京御幸町　　　　　　　　蒹葭屋孫兵衛
大坂心齋橋通備後町　　　　近江屋平助
仝　　　　　　　　　　　　境屋卯八郎
東京日本橋通一丁目　　　　須原屋茂兵衛
仝　二丁目　　　　　　　　山城屋佐兵衛
仝　　　　　　　　　　　　小林新兵衛
仝　通四丁目　　　　　　　須原屋佐助
仝　芝神明前　　　　　　　和泉屋市兵衛
仝　横山町三丁目　　　　　和泉屋金右衛門
仝　淺草茅町二丁目　　　　須原屋伊八
仝　淺草廣小路　　　　　　淺倉久兵衛
仝　馬喰町二丁目　　　　　森屋治兵衛
仝　横山町一丁目　　　　　山中萬次郎
仝　通油町　　　　　　　　藤岡屋慶次郎

010190522933